
Hidden The Fact 外伝 Phase ROCKMAN EXE BEAST

フォルネウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hidden The Fact外伝 Phase ROCKMAN
AN EXE BEAST

【ZIPコード】

N2727BA

【作者名】

フオルネウス

【あらすじ】

様々な世界を旅する少年、『篠崎リョウ』。

彼が今回やつて来た世界は、ネットワーク技術が飛躍的進化を遂げた『ロックマンエグゼ』の世界。

その世界に突如現れた2体の獣と謎の集団が引き起こした事件にリョウは巻き込まれる…。

- ・『魔法少女リリカルなのはStrikers Hidden

The Facts』の外伝にして前日談！

本編に至るまでのリョウの旅の記録です。

(注意・この作品には、『魔法少女リリカルなのは』の要素がほとんどありません。)

1st プログラム ネットワーク世界へ（前書き）

第1話からグダグダです…。

突つ込み所が多いかと思いますが、後に解説します。

それではどうぞ！

1st プログラム ネットワーク世界へ

高層ビルが建ち並ぶ町の一角に存在する人気の無い空き地。そこに突然円形の魔法陣が現れ、そこから人が現れた。それは高校生くらいの少年で、紺のローブを纏っている。

「さて、今回はどんな世界かな?」

少年の名は『篠崎リョウ』。

ある事情により異世界を旅している。

一見すると一人旅に見えるが、彼には頼れる相棒がついている。

「それじゃ、まずは情報収集だね。行こう、ファーブニル。『はい。』

相棒の名は『ファーブニル』。

リョウの魔導師としての力を發揮する為に必要な『デバイス』であり、互いに固い絆で結ばれている。

「それにしても、高層ビルが多いな。」

『かなり文明が進んでいますね。』

『だね。』

迂闊に話すと怪しまれるため、念話で会話をしている。

「とりあえず、地名だけでもわかれ……お、地図発見。」

リョウは道に設置されている地図で地名を確認する。

地図に書いてあった地名は……。

「テンサンシティ……秋原町……この地名、前に見た事があるような……。」

『『間違いなく、以前に同じ地名を見ています。』』
「『だよね？確かに『ロックマンの世界』だったつけ。でも、こんなにビルが建つてたつけ…？』』
『『同じ世界観の別の世界といふことも考えられます。』』
「『なるほど、平行世界つてやつね…。この世界なら必要なツールは揃つてるし、もう少し情報を集めよつ。』』
『『了解です、相棒。』』

そういつて、大通りを歩き始めたリョウは、ある店の看板を見つける。

その店とは……『チップショップ・ヒグレヤ』。

「『……よしロックマンの世界確定。』」「
『チップショップなんて物はこの世界にしかありませんからね…
…。』』
「『大して事件も起きてないみたいだし、この世界は素通りしても
……。』』

ドカアアアアン！－

「－？」

突然の爆発音にリョウが辺りを見回すと、少し離れた場所にあるスタジアムと思われる建物から黒煙が上がっていた。

「……僕って事件を呼び寄せる体质なのかな？」

今までに旅をした世界でも、リョウは大小様々な事件に巻き込まれている。『《それは無いと思います……》』

「《……サンキュー相棒。》」

そして、リョウはスタジアムに向かつた。

リョウがスタジアムに到着すると、中には巨大な青い四足の獣と赤い巨大な怪鳥がいた。

どちらも10mは軽く越えるサイズで、互いに威嚇している。

「あれは確か……。」

リョウは以前、こことは別の『ロックマンエグゼの世界』でこれと同じ物のデータを見た事がある。
その名を『電腦獸』と言つ。

「まさか実物を見る事になるなんて……。でもおかしい。どうして現実世界に……？」

電腦獸は本来、『電腦世界』と呼ばれる電子機器の内部に作られた世界に存在する。

それはこの世界の特徴に関係するのだが、少なくとも本来は現實空間に出現することはない。

「とにかく様子を見るしか無い……。下手に魔法を使つたら色々と面倒だ……。」

そうしていると、スタジアムに3人の少年が現れた。
2人は小学生くらい、1人は少し背が高い。

(あれはこの世界の光熱斗に伊集院炎山……もう1人は誰だ?)

リョウは以前、別の世界で青いバンダナを付けた少年…『光熱斗』
と、黒髪の上に白髪が乗つかったような独特の髪型の少年…『伊集
院炎山』に会った事がある。

しかし、もう1人の緑色の服をきた長身の少年には見覚えが無い。

(まあ、そのうち分かるだろ。それにしても、一体何をするつもり
なんだ…?)

リョウは彼らの意図が全く解らなかつた。

そして、これから大きな事件に巻き込まれる事も、その中で運命的
な出会いがある事も、リョウは全く予期していなかつた…。

1st プログラム ネットワーク世界へ（後書き）

無事に（？）第1話終了！

リョウ「しかし、唐突に始まつたよな…。」

仕方ないでしょ、どうしても書きたかったんだから。

リョウはこの話よりも以前に、ゲーム版のロックマンエグゼの世界に行っています。

ただし、その時間軸は『Hグゼ6』の約半年後で、リョウはデータを集めたりツールを入手しただけでほとんど何もしてません。

それでは、いつ更新できるか分かりませんが、次回もお楽しみに！

『サイバージャングルへ、トランスマッシュション！』

2章プログラム クロスフュージョン（前書き）

一つだけ警告です。

今回は最初以外は全くと言つていい程原作と同じです。
本当はもう少し長くする予定だったのをキリが悪いからと途中で切
つたのが原因です。
ご了承ください。

それでは、どうぞ！

2ndプログラム クロスフュージョン

2体の電腦獸の前に現れた3人の少年。リョウはその様子をスタジアムの観客席に隠れながら見ているが、少年達の意図が全く読み取れなかつた。

以前リョウが訪れた世界には『「コピー・ロイド』』といつ『ネットナビ』を実体化させるロボットが存在したが、それを持つてゐる様子もない。

そもそも、電腦獸の前に何の装備も持たずに生身で、しかも小学生くらいの子供が現れるなど自殺行為でしかない。

「『…最悪の場合、砲撃魔法で電腦獸をぶつ飛ばして彼らを救出するよ。設定を物理破壊に変更。』」

『《了解。》』

リョウとファーブニルが念話で作戦を決めていると、突然虹色の半透明のドームのような物が発生。スタジアムを完全に覆つた。

「これは…？『ファーブニル、この結界みたいなやつのデータ、取れる？』」「

『《やつてみます。》』

そして少年達はこの世界の携帯端末『P.E.T』を取り出し、何かを装填した。

その瞬間、少年達は光に包まれた…。

少し時間を遡り、リョウがやつて来る数十分前。

ネットワーク技術の最先端を誇る施設、『科学省』。

その施設の食堂では、3人の少年による『一テイニング…』といふ組の言い争いが繰り広げられていた。

「でもさ、それじゃあオレとライカの援護に回れないって話じゃん。」

「

青いバンダナを身に付けた少年、『光熱斗』。

「そうじゃ無い。何度言つたら解るんだ。あのタイミングだと、俺が前に出なけりゃタイムは縮められないだろ。」

黒髪の上に白髪が乗つかつているような独特な髪型の少年、『伊集院炎山』。

「ライカ～、こんな事言つてるぜ？お前も何か言いたい事あるだろ？」

「俺は今まで十分だ。」

軍服を身に付けたやや長身の少年、『ライカ』。

この3人によつて話し合ひが行われていた。

ちなみに、ライカは先程から熱斗と炎山の言い争いに挟まれている。

「ええ～！？」

「P.E.Tの性能が上がつたのだから、あれ位の数なら引き受けの
が当たり前だ。今のフォーメーションで十分だと思うぞ？」

「あ～、分かったよ。やるよやる、今のフォーメーションで行こう。」

「

「『解ればよろしく』。」「

するとい、熱斗のマコトからアラームが鳴った。

『熱斗くん、メイルちゃんからだよ。』

熱斗のナビ、『ロックマン』が知らせる。

画面に映されたのは熱斗の幼馴染みで赤い髪の少女、『桜井メイル』だ。

「メイルちゃん『メー...』、オレ今事件に備えて待機中。んでもって
ミーティングの最中で...」

『熱斗に用は無いの。』

「は？」

『今すぐロックマンとブルースとサーチマンをプログラミンじて。』

「え？」

「サーチマンもか？』

「一体何の用だ？」

『いいから大至急！－！－！－！』

所変わつて電腦世界、『インターネットシティ』に作られた即席の
スケートリンク。

メールの指示通りロックマンと、炎山のナビである『ブルース』、
ライカのナビである『サーチマン』がやって来ていた。

『20年前の電腦世界に消えた君と、またか再会できるなんて。』

ロックマンが今話しかけてるのは、『バブルマン』といつネット
ナビ（？）だ。

しかし、バブルマンは無視を決め込んでいる。

「あ…、それで『あの赤ん坊』をどこで?」

バブルマンは再び無視。

「ねえ、バブルマン…」

「勘違いするなブク! ボクはダークロイド、お前達ネットナビは敵
ブク!」

実はバブルマンは厳密にはネットナビではなく、彼が所属していた組織はロックマン達と敵対していた。だがバブルマンはその性格や行動故か、最弱にも関わらず唯一生き残った『ダークロイド』である。

「フン!」

「…。」

ロックマンがバブルマンの態度に困り果てている…。

「うえええん!!」

「なあ、おいロックマン。」

「自分らちの手みは負えん。代わってく。」

「頼むロックマン。」

ブルースとサーチマンが泣きじやくる赤ん坊を2人がかりで運んできた。

サーチマンに関しては口を捕まれてるせいで上手く喋れなくなっている。

ちなみにこの赤ん坊、ロックマンに似てこむろみつに見えるのは気の

せいだらうか…。

「いや、代われって言われてもボクは経験無いし…。」

「頼む、ロックマン。」

ロックマンはブルースに赤ん坊を押し付けられた。すると、

「ああ…。」

「う?」

赤ん坊が泣き止んだ。

いきなりの出来事に、ロックマンとブルースはきょとんとした表情で互いの顔と赤ん坊を交互に見る。

「……アハハ！エヘヘハハ！」

しかも笑い始めた。

「泣き止んだ。」

メールのナビである『ロール』が言う。

「ロックマンの顔を見た瞬間笑つたでガス。」

熱斗の親友、『大山デカオ』のナビ、『ガツツマン』が続く。

「え…………?」

「どうやら氣に入られたようだな。」

「えええーーー？」

ブルースは完全に他人事である。
それを見ていた熱斗達は……。

「妙だな……。何の目的で、赤ん坊タイプのナビなんか作ったんだ?」「……可愛いからだろ?」

「マスコットならともかく、ナビゲートに適しているとは思えん。」「うーん……まあそうだなー。まあ、この子のオペレーターが見つかるまでロックマン、お前が面倒を見てやれよ。」「えつ、ボクが?」

その時、食堂の電気が消えた。

「あ、停電だ。」

しかしそくに復旧。

「自家発電に切り替えたのか?」

「気になるな……。メインルームに行くぞ!」

「おう!」「

そして科学省メインルームでは、跳ねた髪型で眼鏡を掛けた男性『名人』と、熱斗の父親、『光祐一郎』が巨大なモニターに向かっていた。

「デンサンタウンを中心に、広い範囲で停電が起こっています。」「奴らが……、奴らが現れたんだ。名人、分析映像を出してくれ。」

そこに熱斗達が到着。

「光博士!」

「パパ、何が起こってるの！？」
「メインモニターに映します。」

そして画面に映し出されたのは、巨大な獣。

「…これが、姿無き怪物か。」
「莫大な電気エネルギーを吸つて、半実体化しているが、間違いない
く電腦世界の存在…電腦獣だ。」
「おっし！新型P.E.Tの性能を試す時だ！炎山、ライカ！」

熱斗の言葉に炎山とライカは頷き、3人は現場に向かおうとするが
…、

「待ちたまえ、皆！」

名人に止められた。

「博士、また1体、電腦獣です。」

「何！？」

画面に映し出されたのは、巨大な鳥。
2体の電腦獣は町中で完全に実体化、戦いながらスタジアムに転が
りこんだ。

リョウがやつて来たのはちょうどこの時だ。
スタジアムに人がいる事など知る訳もなく、熱斗達は現場へやつて
来た。

「スゲエ…。」

「2体の電腦獣は敵同士なのか。」
「これ以上の被害の拡大を防ぐんだ。」

「ああ！名人さん、『ディメンショナルエリア』を！」

「『さん』はいらない！『ディメンショナルエリア、展開！』

スタジアムが『ディメンショナルエリアに覆われる。

「シンクロチップ、スロット・イン！」

「「「クロスフュージョン！」」

PETに『シンクロチップ』を挿入した熱斗達は光に包まれ、次の瞬間そこにいたのはロックマン、ブルース、サーチマンに似た姿をした3人だった。

そこに名人から通信が入る。

『皆、実は先程、電腦獣とは別の妙な反応があつた。そちらにも注意してくれ。』

「「「了解！」」

3人はブースターを使って飛び上がる。

「メガキヤノン！」

「ゼイバー！」

「バルカン！」

3人はそれぞれビーム、衝撃波、機関砲を電腦獣に放つが効果は無い。

3人は次の攻撃に移る。

「バトルチップ・スプレットガン！トリプルスロット・イン！」

「バトルチップ・ソード、ワイドソード、ロングソード！」

「バトルチップ・バルカン！トリプルスロット・イン！」

「「「プログラムアドバンス！」」」

Cfロックマンの両腕が巨大な大砲に、Cfブルースの両腕は非常に長い光の剣に、Cfサーチマンの右腕は超巨大なガトリングガンに変わる。

「ハイパー・バースト！」

「ドリームソード！」

「ムゲンバルカン！」

3人は大技を同時に発射し爆煙があがる。
しかし…、

「ダメなのか…？」

「俺達は眼中に無しか！」

電腦獣はまったくの無傷だった。

「くそつ、もう一度だ！」

「待て熱斗、見ろ！」

電腦獣の姿が徐々に透けて行き、最後に一度ぶつかり合ってそのまま消えた…。

2章プログラム クロスフュージョン（後書き）

リョウ「僕の出番が最初しか無いんだけど……？」

いや、だから前書きでも言つた

リョウ「黙れ！」 顔面キック

ギャアアアアアアー！ー！

次回はちゃんとオリジナル展開を多く取り入れます……。

それでは次回もお楽しみに！

『サイバージャングルへ、トランスマッシュショーン。』

3rdプログラム 秘められたパワー（前書き）

今回は割と楽に書けました。

まあ、元々は一つの話だった物を分けただけなので当たり前といえば当たり前ですが…。

それではどうぞ…。

3rdプログラム 秘められたパワー

熱斗達がスタジアムにやって来てからの一部始終を見ていたリョウは呆気にとられていた。

(…人がネットナビみたいになつて戦うなんて、そんなのありかよ…。)

ディメンションナルエリアは既に解除されており、熱斗達の変身も解けていた。

すると今度は3人がスタジアムのフィールド部分に降り、壁に付いているコントロールパネルの前に来ていた。

距離が縮まつたので、リョウにも彼らの言つている事がはつきりと聞こえる。

「プラグイン！ロックマンEXE、トランスマッシュション！」
「プラグイン！ブルース、トランスマッシュション！」
「プラグイン！サーチマン、トランスマッシュション！」

どうやら熱斗達は電腦世界にナビを送り込んだらしい。
それを見ていたリョウは自分のP.E.Tを取り出す。

「『それじゃ、熱斗達には悪いけど、覗かせて貰おうかな。』」「『そう言えば、相棒はP.E.Tを魔改造していましたね…。』」「『その通り。と言つ訳で、アクセス開始！』」

リョウがコントロールパネルにP.E.Tを向けると、赤い光がパネルの端子に当たる。

熱斗達はオペレートに集中している為に気付かない。

リョウはネットナビを持っていないが、P.E.Tを改造した事で電腦世界の様子を確認できる他、バトルチップの効果を任意の場所に発生させられるようになつてている。そして、現在リョウがP.E.Tを使つて見ている電腦世界の様子とは……。

インターネットナビでは、実体化を解除した2体の電腦獸の戦いによつて被害が出ており、沢山のネットナビが逃げ惑つて大混乱を起こしていた。

そのネットナビの中には、ロックマンがいなくなつた為なのか泣きじゃくる赤ん坊ナビを抱き抱えたロールもいた。

「早く逃げないと……きやつ！？」

しかし、電腦獸の戦いの余波で発生した突風により吹き飛ばされてしまう。

「キヤアアアア！」
「危ない！－」

そこにロックマンが到着し、間一髪で救出に成功。

「ロックマン！」
「ロールちゃん、大丈夫？」

すると、赤ん坊ナビがロックマンに引っ付いてしまう。

「アハハ！アハハヘヘ！」
「こ、こら。駄目だつてば……。」

そして、いきなり赤ん坊ナビが光りだし、その光にロックマンは包まれた。

「アハハハハハハ…」

「え……！？」

「え？ ロック…… キャア！」

ロールはロックマンから弾き飛ばされた。

「ロックマン……？」

「う、うわあああーーうう……あああ……ウ……アア……！」

そしてロックマンは光の中でその姿を変えていった。

一方、ブルースとサーチマンは2体の電脳獣に対して攻撃を行っていた。

「ムゲンバルカン！」

「ドリームソードー！」

サーチマンは青い四足の電脳獣にムゲンバルカンを連射。

ブルースは赤い怪鳥にドリームソードの強力な一撃を叩き込む。しかし、電脳獣はまったくの無傷だった。

「くつ……！」

「プログラムアドバンスも効果ゼロだ！」

これ以上2人には…正確には、炎山とライカを含めた4人には打つ手が無くなってしまった。

万事休すかと思われたその時…、

「「…?」」

物凄い勢いで突撃した『何か』によつて、青い電腦獸は吹つ飛ばされた。

電腦獸を攻撃した『何か』とは…、

「グルルルル…！」

…青い電腦獸に似た姿に変貌を遂げたロックマンであつた。電腦獸は体制を建て直し、ロックマンね近づくが…。

「ガアツ！」

ロックマンの攻撃により返り討ちに逢う。

仰向けに倒れた電腦獸にロックマンはさらに攻撃を加える。その戦い方はまさに……野獸そのもの。

「何だ…あのパワーは…!?

サーチマンもブルースも驚くしか無い。

攻撃による煙が晴れると、今度は赤い怪鳥の姿になつたロックマンが現れた。

その背中には大きな翼があり、それを使ってロックマンは猛スピードで飛翔する。

そして、遙か上空にいた怪鳥型の電腦獸に体当たりを仕掛け、更に上空から地面に叩き落とした。

電腦獸の墜落によつて煙が立ち昇る。

そして、その中からは変身が解け、赤ん坊を抱き抱えたロックマンが現れ、そのまま倒れた。

「ロックマン…ハッ！？」

ブルースとサーチマンはロックマンに駆け寄ろうとするが、目の前には怪鳥、後ろには四足の電腦獸がいる。しかし2体の電腦獸は姿が歪み始め、その場から消えた。

「「ロックマン！」」

脅威が去つた事を確認したブルースとサーチマンは、すぐさまロックマンに駆け寄る。

倒れたロックマンの腕の中では、赤ん坊ナビが嬉しそうに無邪気な笑い声を上げていた…。

それから数分後、スタジアムから熱斗達がいなくなり、リョウもP.E.T.の電腦世界への接続を切つた。

「『……これはまた、とんでもない事になつたね…。』」

『『どうします？』』

「『あれを見てしまつた以上、無視はできないでしょ。しばらくはこの世界に留まるよ。』」

『『了解です。』』

「『とりあえず宿を探そつ。この大都會ならすぐに見つかるだらうし。』」

『『ええ…とにかくで、お金はあるんですか？』』

「『一応、前にバイトで稼いだ10万ゼニーがP.E.T.に入ったまま…。』」

『あの時は必死で働きましたからね…。』』

「『あはは…。』」

スタジアムから出たリョウは宿を探すために町を歩いているのだが、ここにある重大な事に気付く。

「…寒…」

現在この世界はクリスマス直前、すなわち冬なのだ。
今は近くの店でコートを買ったものの、先程までのリョウの格好は（長袖とはいえ）Tシャツ一枚と言つ季節外れの物。
しかも、周りから浮き過ぎるのを避ける為にローブを外しており、
見た目は別に不自然では無いが、実は寒がりであるリョウにはある
種の地獄であった。

『『風邪をひかないように気をつけ下さいよ。』』

「『分かってるよ……ん?』」

リョウは何かを発見。

そこにはP.E.T.の地図データと周りの風景を何度も見比べている小
学生くらいの少女がいた。

『『道が分からないんですかね…?』』

『『だらうね…。とりあえず助けるか。』』あのー、その君ー!』

「?」

リョウの声に少女が反応する。

「道に迷つてゐる？」

「「ル」に行きたくて…。」「えーと…、秋原小学校…？今がここだから…、そこの信号を右に曲がって、そのまま真っ直ぐ行けば大丈夫だよ。」

「ありがとうございます…。」

「それにしても、こんな夕方に学校なんてどうしたの？」

「…その…、友達と待ち合わせを…。」

「そつか。それじゃ、あまり遅くまで外にいなによつにね。女の子が一人でいると危ないから。」

「はい…。」

少女はリョウが教えた方向に歩いて行く。
リョウは少女を見送りながらファーブニルと『ある事』を話していった。

『『……相棒、気付きましたか?』』

「『勿論、あそこまで気配が違うのに気付かない訳がないよ。……あの子、人間じゃ無い。恐らくはネットナビ…、しかもオペレーターがないみたいだ。』」

『『彼女も先程の事件に関わっているのでしょうか?』』

「『さすがにそこまでは分からぬけど…。ともかく今は宿を探そう。この寒さの中でホームレス状態はさすがにキツい。』」

『『そうですね…。』』

リョウは再び、宿を探して歩き始めた。

3rdプログラム 秘められたパワー（後書き）

これで導入は無事終了ですね。
しかし…、何だこの原作そのまんま率…。

リョウ「書く前から分かり切ってただろう…。」

まあそりなんだけど、こざ書いてみると改めて見せつけられると書
うか…。

リョウ「ふーん。」

リョウPENTの色はライトグリーンです。

それから『氣配』つていつのま、CLANP作品の『ツバサ』の黒
鋼が言つている『物の氣配』です。

それでは次回もお楽しみに！

『サイバージャングルへ、トランスマッシュショーン!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2727ba/>

Hidden The Fact外伝 Phase ROCKMAN EXE BEAST

2012年1月12日19時56分発行